

基調講演

「リニア・三遠南信時代における飯田市のまちづくり」

佐藤 健氏（長野県飯田市長）

日 時：2022年1月29日（土）10：00～

場 所：愛知大学豊橋校舎（オンライン開催）

○司会（菊地）：皆さん、こんにちは。本日は、「第9回越境地域政策研究フォーラム」にご参加を賜りまして、誠にありがとうございます。私は、基調講演の司会を担当します愛知大学の菊地裕幸と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

まずは、本日、ご講演を賜ります、長野県飯田市長、佐藤健様の簡単なご紹介をさせていただきます。

佐藤市長は、1967年飯田市のご出身で、1991年東京大学法学部をご卒業、同年、自治省（現：総務省）に入省されました。自治財政局財政課課長補佐、地方債課課長補佐、大臣官房付等の要職を歴任される一方、秋田県庁、鳥取県庁、大分県庁など、地方の現場経験も豊富でいらっしゃいます。2011年から2019年まで飯田市副市長を務められ、その後、2020年10月から飯田市長に就任されております。

本日は、「リニア・三遠南信時代における飯田市のまちづくり」というタイトルで基調講演をいただきます。なお、講演終了後には質疑応答の時間を設けていただきます。質問につきましては、ZOOMのチャット上にて受付をいたします。チャットにて質問をお寄せいただく場合には、送信先は「フォーラム質問受付」宛でお送りください。なお、時間の都合上、全ての質問にお応えできない場合もありますので、あらかじめご了承ください。

それでは、佐藤市長、どうぞよろしくお願いいたします。

○佐藤：皆さん、おはようございます。飯田市長の佐藤健です。今日は、「第9回越境地域政策研究フォーラム」ということで、基調講演のお声掛けをいただきまして、ありがとうございます。

それでは、画面共有させていただきながら、お話しします。



スライド1「表紙」



スライド2「自己紹介」

簡単に自己紹介をさせていただきます。1967年、飯田で生まれたということですが、正確には合併されて飯田市になった町で生まれました。そして、高校卒業まで飯田で過ごし、1991年に、当時の自治省（現：総務省）に入省しました。

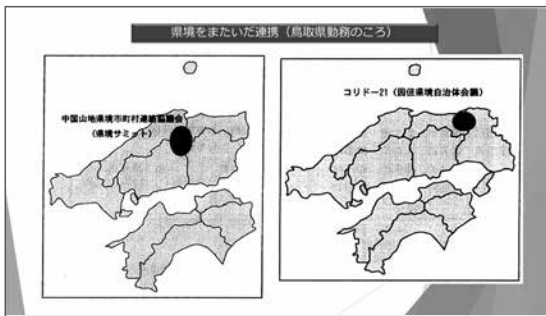
自治省の場合は、霞が関と地方を行ったり来たりすることになります。入省してすぐに秋田県庁に1年間、それから、30歳になる少し前から32～33歳ぐらいまで鳥取県庁に赴任いたしました。今は早稲田大学の教授になっておられる片山善博知事の下で、非常に薫陶を受けたのが鳥取県庁時代です。

それから40歳前後の頃、大分県庁に赴任しまして、そこで管理職を務めました。その大分県庁時代に、2人目、3人目の子どもが生まれ、そのときには、それぞれ10日間の育児休暇を取りました。正確に言いますと、育児休暇はもっと長い期間を休むことを指しますが、出産に伴って10日間休んだということです。

第3子の誕生時の10日間の記録を、当時の総務部長が育児休暇を取りましたということで、大分県のホームページに「幸せな10日間」という手記の形で載せました。それが今でも載っていますので、ご興味のある方は、「幸せな10日間 大分県」あるいは「幸せな10日間 佐藤」でインターネット検索していただくとヒットするのではないかと思います。

その後、2011年から2期、約8年間、飯田市の副市長を務めたわけですが、このときに、職員向けのグループウェア、庁内掲示板に載せていたコラムがあります。それを『副市長室から』という本にまとめました。これもインターネット検索しますと、Amazonなどでは買えませんけれども、出版社から買えるのではないかと思います。ご興味のある方は見ていただければと思います。

その後、いったん総務省に戻り、退職をし、2020年10月から飯田市長を務めさせていただいております。今日は副市長時代も含めて、飯田市の地域づくりについて、自分なりに考えているところをお話しさせていただきたいと思います。



スライド3 「県境をまたいだ連携（鳥取県勤務のころ）」

先ほど、鳥取県に勤務をしていましたというお話をしましたが、その頃も県境をまたいだ連携は、実は非常に身近にありました。この図の右側ですが、鳥取県は、兵庫県の北側、但馬地域と接してしまっていて、この「コリドー21（因田県境自治体会議）」という主として観光連携に関する連携会議があり、頻繁に、といっても年に数回ではありますが、但馬地方に行き、ま

た特に大阪地方にカニと温泉をPRするといった観光キャンペーンを但馬地域と連携してやっていました。

鳥取県の県境近くには、岩井温泉（岩美町）という温泉があります。そこは本当に温泉とカニで売り出しています。ネームバリューは、隣の城崎温泉のほうが非常に有名ですが、それを合わせてPRするという取り組みをしていました。

その後、市町村振興課長になりましたが、その頃に関わったのが図左側の「中国山地県境市町村連絡協議会」です。このような長い名前でも呼んでいただけではなく、「県境サミット」と呼んでいました。この県境サミットの取り組みを一生懸命にやっていた県境の町村がありまして、そのサミットの会議や打ち合わせなどにも、よく呼ばれて行っていました。

この県境サミットの取り組みが現在はどうなっているのか、インターネットで検索してもよく分かりません。もしかしたら休止になっているのかもしれないと想像もしています。当時、この4県の県境に位置する町村長たちといいますが、もう少し若手、課長クラスの人たちが非常に熱心に「一緒にやりましょう」ということで県境連携をやっていました。

先ほど、川井先生から「文化を超えて」という話がありましたが、この地域は、かつてのたたら製鉄、それに伴う製炭、炭づくり、あるいは和牛を育てるという共通の文化背景があることもありまして、連携するという話が出てきたと思います。そこで、もともと文化的にも、住民の生活的にも行き来がある地域で連携して、いろいろなことをやろうと取り組んでいました。

サミットという市町村長が集まる会議は、年に1回だったかと思います。日常的に、非常によくつながっていて、地域のなかで共通の広報誌が発行されていたり、いろいろな連携がありました。一番分かりやすいのが、4県をまたいだ地域全体の観光パスポートのようなものがありまして、それを見せることで、それぞれの地域の観光施設で割引が受けられるといった連携をしていたり、もう少し軽い感じで、それぞれの地域でおこなわれるカラオケ大会やフォトコンテストなどを、この県境サミットの事業として協働でやっていました。そのような県境での取り組みは、鳥取県当時も非常に興味を持って見ていました。

当時、関係する皆さんとお酒を飲みながら、いろいろと話をするなかで、バカボンのパパの「反対の反対は賛成なのだ」という名台詞がありますが、「端っこと端っこをつなげたら真ん中なのだ」という感じで、「みんな端っこ同士だけれども、端っこがつながれ

ば、そこが真ん中だ」ということを言いながら取り組みをしていました。

当時、それを引っ張っていた課長さんが、その後、中心になっていた町の町長になりましたが、残念ながら若くしてお亡くなりになってしまいました。推進力のある方もなくなったということもあり、もしかしたら今は休眠状態になっているのかもしれませんが。とにかく全国的にもといいますか、私が赴任した先でも、このような県境での取り組みをやっていたというご紹介を最初にしておきたいと思います。



スライド4 「三遠南信地域における飯田市の位置」

この三遠南信地域でも越境での連携を、ということですが、先ほどの川井先生の「『県境を意識する』というのがコロナで出てきましたね」というお話でちょっと思い出したことがあります。県境という意味では、飯田市が接しているのは浜松市と静岡市です。この二つの政令市と県境で接しているということです。例えば、介護保険の点数を考えると、政令市に接していると割増しみたいなのがあったりしますが、「接しているといっても3,000メートルの山で接しているんですけど」という話がありまして、厚生労働省に「こういう計算の仕方はおかしい」と言いに行ったりしていたことを、川井先生の話聞きながら思い出しました。

飯田市も、長野県の南の端っこにあるわけです。浜松市も政令市ではありますが、静岡県の西の端っこ。それから、豊橋市を中心とする東三河も愛知県の東の端っこということで、先ほどの「端っこ端っこがつながったら真ん中なのだ」という話で言いますと、ここにある種の中心になって、いろいろなことを動かしていければ面白いなと考えています。その三遠南信の連携の話は、また後でお話をさせていただきます。

今日、講演をお聞きになっている方々のなかには、「飯田のことはよく知っているよ」という方もいらっ



スライド5 「飯田市の概要」

しゃれば、「いや、あんまりよく知らない」という方もいらっしゃると思いますので、簡単に飯田市の概要をお話ししておきたいと思います。

先ほど申し上げましたように、長野県の南のほうに位置します。長野県には19市ありますが、19の市のなかでは一番南端にある市です。今、人口が約9万8,000人、10万人を少し切ってきたという人口減少下にあります。

先ほど、3,000メートル級の山で静岡県と接しているという話をしましたが、市域には南アルプスの3,000メートル級の山があり、また市の中央を天竜川が流れています。地形的には標高300メートルぐらいから3,000メートルぐらいまで標高差のある市です。

「『結い田』と表記されて、その名が今日に至る」と書いてありますが、飯田という名前の由来は「結い」の「田」、田んぼ作業を一緒にやる「結い」でやってきたという語源ではないかといわれています。住民が助け合いながら、ここまで暮らしを営んできたということですね。

よく東京などで「飯田市です」と言いますと、「雪が深くて大変ですね」とか、「真田幸村、いいですね」などと言われます。それぞれ飯山市のことだったり、上田市のことだつたりを言われているのだと思いますが、まだまだ知名度が足りないなと思いつつも、これからもっともっと、全国の皆さんに飯田市を知っていただけるように頑張っていきたいと思っています。

それでは、まちづくりの話に入っていきます。今、ご覧いただいているものは、「将来構想図」という絵です。数年前に、飯田市が市制施行80年を迎えたときに、タイムカプセルを掘り出しました。市制施行50周年のときに埋められたタイムカプセルでしたが、中からその頃の総合計画にあたるものが出てきて、この絵が描かれていました。この「将来構想図」は、約30年



スライド6 「将来構想図」

前に当時の人たちが、「将来の飯田はこんなふうであってほしいな」ということで描いた絵になります。

当時は、どちらかといいますと、このようなインフラが整ってくるといいなという構想の部分がかかなりありますが、これを見てもみますと、三遠南信自動車道が描かれていたりします。絵の右下には「中央新幹線」というキャプションが付いていますが、今のリニア中央新幹線にあたるようなものも描かれていたり、他にも施設整備だったり、農村がこんなふうになったらいいなという構想が描かれています。

これを見たときに、30年の時間をかけて、そのつもりでやってくると、かなり実現するのだなという素朴な感動とといいますか、感慨を感じました。三遠南信自動車道も、この10年のうちには全通するでしょうし、リニア中央新幹線は少しスケジュールがあやふやにはなっていますが、これも10年以内に通るでしょう。30年前の人たちが、どこまで実現できるという確信を持って描いていたかは分かりませんが、未来の絵姿を共有して「ここに向かっていこう」と言うことは、それを実現していくために大事なことなのだなと思いました。

そのようなこともありまして、私が市長選挙に立候補



スライド7 「2050年、飯田は日本一住みたいまちになる」

補するにあたり、今から30年後の2050年にはどのようなまちになっていきたいかということ、スタッフとも相談しながら絵に描いてみました。そしてマニフェストとともにご覧いただきながら、こんなまちをつつていきたいと思っていることをお話ししました。

「2050年、飯田は日本一住みたいまちになる」というタイトルですが、当時、選挙公約をつくる時に直面をしていました。

小泉元首相には「郵政民営化」とか、「自民党をぶっ壊す」などという、非常にインパクトのあるワンフレーズがありました。選挙に当たって、何か一言で「こうするんだ」ということを言ったほうがいいのではないかということで、例えば、「この数字を目指します」という数値目標を出すほうがいいのではないかというスタッフも相当いました。

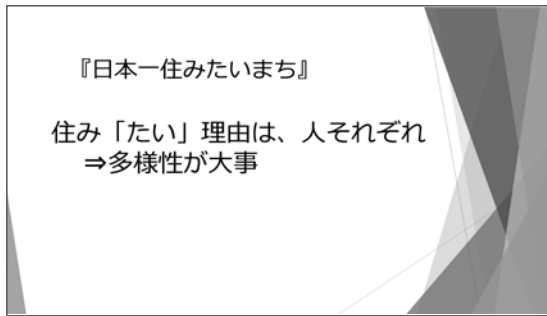
特に、会社経営をやっている人たちなどは、「これを達成する」ということを打ち出して、それに向かっていくことを選挙で訴えたほうが良いというアドバイスがあったわけです。飯田下伊那地域の魅力は、一言で言い表すのは難しいといますか、気候であったり、文化であったり、あるいは暮らし、暮らしぶりそのものが、実はとても素晴らしいところだということをもっともっと強調したい、そこが大事なのではないかと思うなかで、どうすればいいのだろうとずっと考えていました。

そのなかで、30年後はどのようなまちにしていきたいかという絵を、最初に描き始めました。描いていくながら、このまちの姿をどのように表現すればいいのかなといったときに、「日本一住みたいまち」という言葉ではないかということで、「30年後に飯田は日本一住みたいまちになる」というかたちにまとまったというわけです。

この絵は細かく見ていきますと、イメージとして、いろいろな人がいろいろな活動をしているとか、文化が残ったり、自然が残ったりということを見て取っていただけるかと思います。

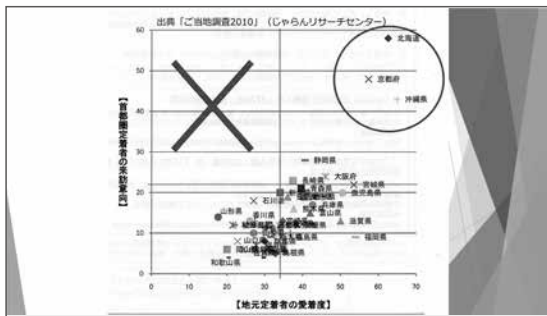
先ほど見ていただいた30年前の「将来構想図」と明らかに違うのは、インフラの整備が主眼というわけではなく、暮らしぶり、人の活動のようなことを絵のなかには描いています。あと、私自身の心配事といますか、30年先を見たときに、「あれができる。これができる」ということばかりではなく、「あれがなくならないでほしい。これが残っていてほしい」という思いが相当あります。文化の話にしても、農村風景の話にしても、あるいは、「お裾分け」のような人々の触

れ合い方、付き合い方にしても、このようなものが30年後にも残っていてほしいなと思ひながら、この絵を描きました。



スライド 8 『日本一住みたいまち』

「日本一住みたいまち」というフレーズをつくる時に、「日本一住みやすいまち」という言い方をあえてしませんでした。住み「たい」と主体的に思う理由は人それぞれだろうと思ひますし、それは客観的に数字で表せるものばかりではないからです。あるいは住んでいる人々には、そこに住みたいという理由をせひ持っていてほしいといひますか、主体的にそう思ひてほしいということもあり、「住みたいまち」としました。その住みたい理由はそれぞれで、そのような意味では多様性が大事だろうということ、先ほどの絵になっています。



スライド 9 「ご当地調査 2010」

いつも私が、子どもたちやいろいろな方々にお話するときに使わせていただひている資料を、少し共有したいと思ひます。これは、じゃらんリサーチセンターという旅行雑誌『じゃらん』の編集部から派生した研究センターの資料です。2010年の「ご当地調査」ですから、もう10年以上前の調査ですが、どこの県がどうだということを見たい図ではありませんので、古

いということはお容赦いただひたいと思ひます。

横軸には「地元定着者の愛着度」、要するに、住んでいる人の愛着が強ければ強い都道府県ほど右に現れます。一方縦軸は、首都圏、都会にお住まいの方が行ってみたいと思うかどうかという来訪意向の度合いになっています。ここには右肩上がりの相関関係があるということ、地元の愛着度が高い地域へこそ人が行きたいという傾向が見て取れます。

もちろん、愛着が強ければ、人がそこに行きたいかといひますと、必ずしもそうではなく例外も見られますが、地元の人の愛着が低いところだけでも人が訪れてみたいという、図の中でバツ印が打ってあるエリアは皆無です。やはり地元の人が地元のことを好きになる。好きになるというの、 「好きになれ」と言っているのではなく、そこに住まうにあたっては、地元のことをよく知り、そこに愛着とか誇りとかが感じられることがとても大事だということをお話するの、この分布図を使っています。

ですから、地元の人が「地元には何にもないし、つまんないし」と言ひてしまえば、そこには人は来ませんし、もっと言ひますと、自分たちの子どもや孫にそう言ひながら「地元へ帰っておいで」というのは無理があります。自分たちの暮らしを肯定的に捉えて、「すぐ『何もない』とか『つまらない』とか言わないで、いろいろやっひていきましょう」ということを呼び掛けています。



スライド 10 「飯田市 (南信州) のまちづくり」

それでは、飯田市が具体的にどのようなまちづくりをやっひてきたかということをお話させていただきます。

実は、この図でいひますと、左上のほうにある「飯田」と書いてある部分にあった2町が合併し、最初の飯田市になりました。その後昭和30年代、平成と合併を繰り返して、今の飯田市ができています。



スライド 11 「飯田市域の変遷」

飯田市は旧市内5地区も含めて20地区に分かれていて、それぞれの地区に、それぞれ公民館が置かれています。

この公民館の話は少し後で述べさせていただきますが、飯田市は一つの市とはいえ、20の地域に分かれています、その分かれているそれぞれの地域の自治を非常に尊重してきています。

合併をしたときに効率化ということで、いろいろな公共的なサービス窓口などを集約していくことが一般的な流れですが、飯田の先人たちは、例えば、もともと町村役場にあった機能を全て市役所に集約してしまうのではなく、あるいは、それぞれの地域にあった公民館を一つの公民館にまとめてしまうのではなく、それぞれの地域の自治を尊重しサポートするための体制をずっと大事にしています。もちろん、役場がなくなれば、もともと役場にいた人数の職員が残ることはないですが、窓口担当者だけではなく、保健師を配置し、また公民館主事として市の職員を配置するというかたちで、それぞれの地域の自治的な取り組みをサポートすることを、昭和30年代からずっと続けています。

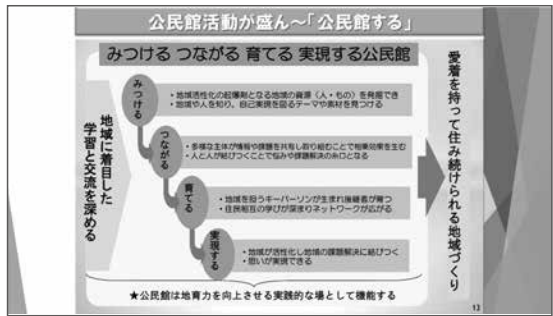
結果として、今の職員配置のなかで、定数800人ぐらいいるうちの100人余が、そのような地域組織に属しています。これは行革的な観点、効率化を図ろうという観点では、第三者的に見ますと、市役所にもっと集約できないのかという話はあるのかもしれませんが、私としては、これを崩してしまったら、再構築することは非常に難しいだろうと思っていますので、ここはぜひ大事にしていきたいと思っていますところでは。

先ほど20の地区があると申し上げましたが、それぞれが、住民自ら地域の将来構想計画をつくっています。従って、飯田市内には、このような基本構想・基本計画が20本あります。全国的に見ましても非常に稀といえますか、他に例を知りません。



スライド 12 「地区基本構想を全地区で策定」

各地区が、自分たちの構想・計画を持っているということは、この飯田のまちづくりの非常に大きな特徴ではないかと思います。



スライド 13 「公民館活動が盛ん〜『公民館する』」

それから、公民館活動が盛んであるということも非常に大きな特徴です。スライドのタイトルに「公民館活動が盛ん〜『公民館する』」と書いてあります。私たちが研究者の方から言われて、「あっ、そのような言葉も確かに使っている人がいるな」と思ったのが、「公民館する」という言葉です。これは公民館の役員を受け持ったりして公民館活動に参画することになった、活動しているという文脈として使われている言葉だと思います。「公民館することになってな」とか「公民館しると、なかなか面白いに」とか、そのような会話が聞こえてきます。この「公民館する」という言葉は、それだけ住民の皆さんのなかに、公民館活動が身近なものになっているということの現れです。

この公民館の話だけで講演ができるほど、飯田にはいろいろな蓄積があると思います。このような公民館活動が盛んであることが、20地区に、地区それぞれの構想・計画があるという住民自治の力を下支えしているのだろうと思っています。

またちょっと違う側面から飯田のまちづくりを見て



スライド 14 「三六災害1」

いきたいと思います。今から約60年前、昭和36年に「三六災害」という大きな水害が、この地域を襲いました。その当時の写真を見ていただいています。天竜川が氾濫するなど非常に大きな水害でした。

左の写真は川路という地区の小学校付近ですが、家が水没しています。右の写真は大鹿村の大西山で山体崩壊が発生しました。このようなかたちで多くの犠牲者を出す非常に大きな災害がありました。

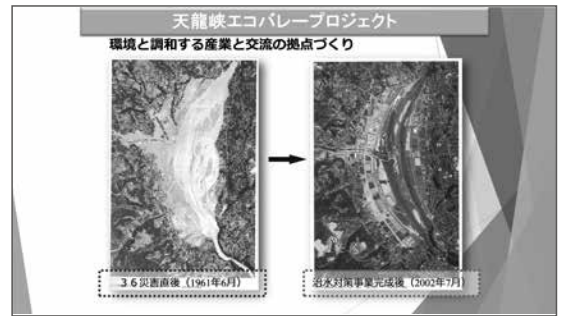


スライド 15 「三六災害2」



スライド 16 「三六災害3」

この災害をどう乗り越えてきたかということです。先ほど、校舎の前の家が軒先まで水に浸かっていた写真がありました。川路地区では、人的被害は少な



スライド 17 「天龍峡エコバレープロジェクト」

かったにせよ、非常に広い範囲が水没しました。その三六災害に見舞われた区域では、その後、高上げ工事も含めた大規模な治水対策工事などがおこなわれました。今は、この埋立地を中心に企業誘致が行われるなど、住みやすい安全な地域になっています。飯田の一つの歴史として、この災害を乗り越えてきたということです。

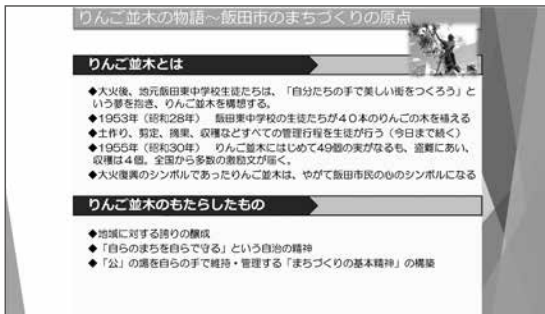
さらに時をさかのぼりますと、昭和22年に「飯田大火」がありました。このときに、先ほど旧市内と申し上げたところの、市街地の7割を焼失するという非常に大きな火災がありました。この焼損面積48万平方メートルは、今でも戦後最大の市街地大火となっております。戦後まだ間もない時期で、飯田市そのものは空襲で焼けることはなかったですが、結果的に、右側の写真のように、昭和22年の大火でまちがほぼ焼け野原になりました。



スライド 18 「飯田大火の記憶」

当時は、まだGHQ（連合国軍最高司令部）の影響下にありまして、この焼けた市街地の真ん中に35メートルという大きな幅の防火帯を兼ねた道路が設けられるという復興都市計画が実行されたわけです。

その防火帯が殺風景だということで、当時の飯田東中学校の生徒たちが「自分たちの手で美しい街をつく



スライド19 「りんご並木の物語～飯田市のまちづくりの原点」

ろう」という思いからりんごの並木をつくらうという構想をしました。

当時、生徒たちは、市役所に「そういうことをやりたいんだ」と一度提案に来たわけですが、大人たちは「りんごは育てるのが難しいので、やめたほうがいいんじゃないのか。やるんなら違う木がいいんじゃないのか」というようなことを言ったようです。それでも、「私たちはりんご並木をつくりたいんだ」ということで、昭和28年に初めて40本のりんごの木を植えました。しかしやはり、りんごの木を育てるのは難しかったようで、また、焼け跡に植えたこともあり、苦労したようです。昭和30年に、ようやくりんごの実がなりましたが、残念ながら、実が盗まれてしまいました。これが新聞で紹介されて、非常に多くの激励文が全国から届き、このようなことにも後押しされた飯田東中学校の生徒たちの頑張りによって、たくさんの実のなるりんご並木が今でも守られています。

その当時の子どもたちは、りんごの実がなる風景の美しいまちでもあり、かつ、りんごの実がなっている人がりんごを盗まない「風景も人の心も美しい町をつくりたい」と、そのようなことを言っていたということです。今もこのりんご並木の精神が、飯田市のまちづくりにおける精神でもあり、シンボルであると位置付けられております。地域に対する誇りを持ち、また自分のまちは自分でつくる、守るという自治の精神の象徴になっています。

このりんご並木を、今の上皇陛下が平成28年に、飯田市へお見えになったときに立ち寄ってくださいました。その記念碑が、りんご並木に立っています。そこに天皇陛下（現：上皇陛下）のお言葉が記されていて、それは、その年の年末にお誕生日の会見で当時の天皇陛下がおっしゃった言葉です。

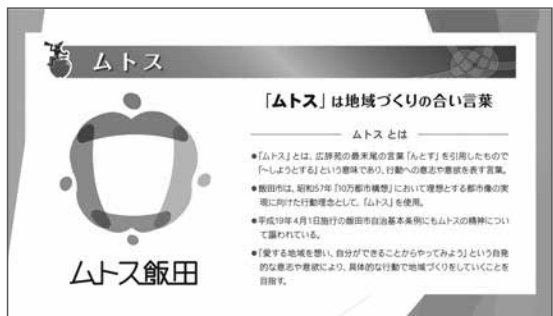
「昭和20年代という戦後間もないその時期に、災害復興を機に前より更に良いものを作るとい、近年で



スライド20 「天皇皇后両陛下下行幸啓記念碑」

言う『ビルド・バック・ベター』がすでに実行されていたことを知りました」と、りんご並木に対して言葉を掛けていただきました。

「ビルド・バック・ベター」という言葉は、それこそ今の岸田内閣になってからも使われている言葉ではありますが、先ほどの三六災害にせよ、飯田大火からの復興となるりんご並木の話にせよ、飯田の先人たちは、災害を乗り越えながら、災害前よりももっといいまちをつくらうと積み重ねてきたというのが、飯田のまちづくりです。



スライド21 「ムトス」

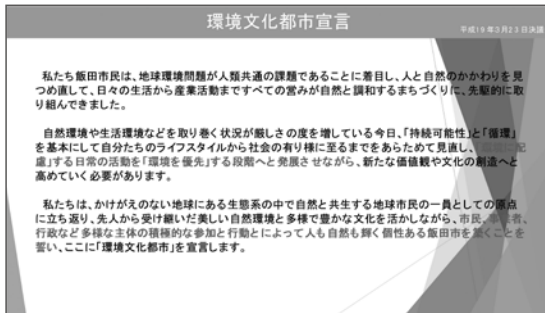
そのまちづくり、地域づくりの合言葉として使っているのが「ムトス」という言葉です。この「ムトス」という言葉は、『広辞苑』の最末尾。今は何かもう一語、後ろに付け加わったという話もありますが、いずれにしても『広辞苑』の一番最後に「んとす」という言葉が出ています。これは「～せん」ということで、「～しようとする」という意味ですが、昭和57年、まだ人口が10万人に至らない頃に、当時の飯田市役所がまとめた「10万都市構想」の行動理念として掲げられた言葉が「ムトス」です。

先ほど、りんご並木の話をしていただきましたが、自分たちの地域を自分たちでつくっていく、守っていく、自



分たちの地域を何とかしようとするという精神を「ムトス」という言葉で表現し、このムトスの精神を飯田市の地域づくりの合言葉にしております。

今、飯田市の組織のなかでも、「ムトスマちづくり推進課」があるぐらい「ムトス」という言葉は大事にしています。現に今の飯田市の総合計画も、「合言葉は『ムトス』」という言葉掲げて、総合計画を進めています。「ムトス」という言葉を、ぜひ、この飯田のまちづくりのキーワードということで覚えていただければと思います。



スライド 22 「環境文化都市宣言」

「ムトス」の精神と併せて、飯田市がこの25年ぐらいの間で取り組んでいるもう一つのキーワードが「環境」です。スライドに「環境文化都市宣言」を掲げていますが、飯田では四半世紀前から将来的な都市像として環境文化都市を掲げています。当時の人たちは、自らの地域文化にできるぐらい環境のことをしっかり取り組んでいまいしょうということで、総合計画をつくるにあたり、そのような都市像を掲げました。その都市像をしっかりと宣言しようということで、平成19年に、この「環境文化都市宣言」を行いました。

環境都市としてのこれまでの歩みを簡単にまとめて

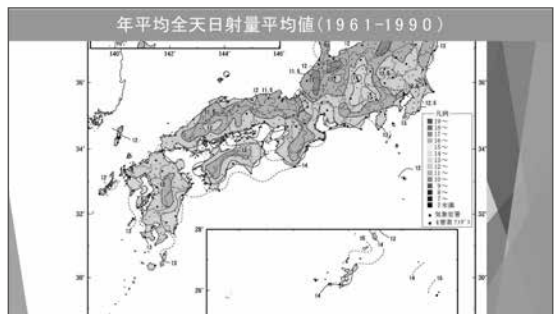


スライド 23 「環境文化都市いいた これまでの歩み」

あります。

ざっと見ますと、環境文化都市宣言をするよりも10年以上前の1996年（平成8年）に、当時の将来都市像として「環境文化都市」を掲げました。今から25年ぐらい前に環境文化都市という都市像を標榜したわけです。そこから、あらためて環境文化都市宣言をするところまで、いろいろな取り組みをしてきていました。ベレットストーブの設置普及を始めたり、あるいは「平成のまほろば事業 市民共同の発電開始」と書いてありますが、これは市民の皆さんに共同出資していただいて、保育園など公共施設の屋根に、太陽光発電設備を載せるといったことを始めています。また、FIT（固定価格買取制度）が始まる前に、飯田市が共同発電所の電気については買い取ることを既に始めるなど環境の取り組みをどんどん進めておりました。

2009年には、環境モデル都市に選ばれて、環境の取り組みをさらに加速化させました。後ほど少し説明いたしますが、地域の再生可能エネルギーは、本来は地域のものということを言いながら、そこで排他的に他に使わせないということではなく、「この地域で発電をするという人たちは、ぜひ地域と連携してやってください。そういうふうにしていただければ応援しますよ」という「地域環境権」というものを規定した条例をつくって取り組んできたりしています。

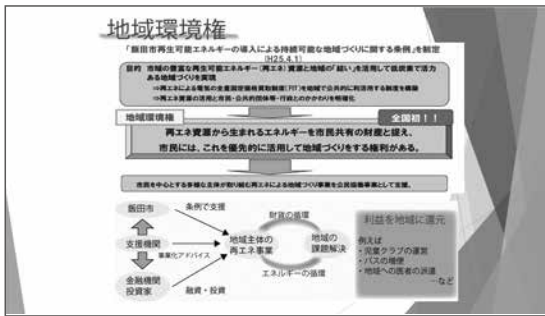


スライド 24 「年平均全日射量平均値(1961-1990)」

ちなみに、飯田市周辺は非常に日照時間が長いです。冬場も非常によく晴れますので、日照時間が長く、あるいは日射量が多いということです。

飯田市あたりの日射量は、静岡や宮崎、高知といった地域と非常に似通ったような日射量があります。このような自然環境も背景に、環境、特に太陽光の取り組みを進めてまいりました。

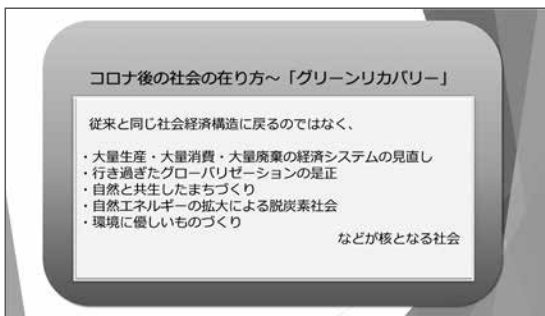
先ほど、地域環境権の話を少し申し上げましたが、この地域で再生可能エネルギー事業を展開する方々



スライド 25 「地域環境権」

に、ぜひ地域と連携してほしいということをお願いしています。具体的には、太陽光発電で得られた収益のなかから一部を地域に還元していただき、そこで地域課題の解決、例えば、児童クラブの運営などに使える資金を地域に回していただくというような協定を結びながら取り組んでいただきます。それを条例として整備いたしました。

このように条例化して取り組んでいるというのは当時全国でも初めてで、当時から非常に先進的な取り組みでした。

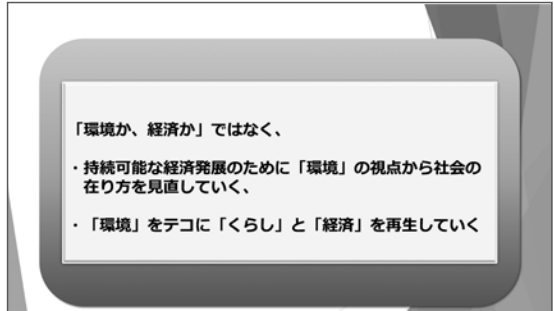


スライド 26 「コロナ後の社会の在り方～『グリーンリカバリー』」

私自身がコロナ後の社会の在り方をどう考えているかということですが、欧州で今、盛んにいわれている「グリーンリカバリー」という考え方に非常に共感しています。新型コロナウイルスの感染拡大が終息した後、従来と同じ社会構造に戻るのではなく、大量生産・大量消費・大量廃棄というこれまでの経済システムを見直していくこと、あるいは、安ければどこまでも資源を求めて手を伸ばしていく、どんなに遠くからでもモノを取り寄せてつくっていく、できるだけ人件費の安いところに工場をつくるという行き過ぎたグローバル化は是正していく必要があると考え

ています。

自然と共生した町、あるいは自然エネルギーをしっかり活用するなかで炭素を回っていき、ものづくりも環境に優しくといった考え方を核にしていく社会をつくっていくべきではないかと思っています。



スライド 27 「コロナ後の社会のあり方について」

これまでは環境を重視することは、多少は経済的なところに目をつぶってでも、というところがあったのではないかと思います。そうではなく、持続可能な経済を回していく、発展させていくためにも、環境の視点から社会の在り方自体を見直していく必要があるのではないかと思います。むしろ、環境をテコに暮らしと経済を再生していく考え方に立つべきではないかと思っています。



スライド 28 「2050 いいだゼロカーボンシティ宣言」

このようなこともありまして、市長就任から半年も経っていないぐらい、昨年（令和3年）3月に「2050 いいだゼロカーボンシティ宣言」をいたしました。これも飯田らしいかたちということで、市だけで宣言するのではなく、市民代表の議会から飯田市議会議員、事業者代表として飯田商工会議所会頭と三者での共同宣言といたしました。

単純に、いろいろなものを減らす、省エネするだけ

ではなく、まさに経済を持続可能にしていく取り組みもできればいいなと思っていますが、具体的な話は、これからになります。



スライド 29 「飯田市が目指す地域脱炭素の姿」

その取り組みの一環として、「地域マイクログリッド構築事業」に取り組みたいと考えています。この地域マイクログリッド構築事業とは、2011年に「メガソーラーいいだ」という1メガワットの太陽光発電施設を中部電力につくっていただいています。これに蓄電池を備えることで、系統連携だけではなく、仮に災害が起こったときには、一定のエリアの電気をこちらに切り替えて、電気が使えるというマイクログリッドを構築できるよう、これから実証実験を始めようとしています。

将来的には、メガソーラーがなくても各家庭の屋根に載っている太陽光発電をうまく活用する形でマイクログリッドを展開していきたいということで、「メガソーラーいいだ」の周辺地域の次はリニア駅周辺での展開を構想し、さらに、他の地域へ水平展開していくことを考えております。



スライド 30 「いいだ未来デザイン2028にSDGs導入」

また、ゼロカーボンシティに向かっていくために、いろいろな立場の者との連携が必要だということで、

来年度、そのプラットフォームの構築に向けて準備をしています。

今、世の中全体でSDGsを進めようとなっていて、グリーンリカバリーと併せて、総合計画に位置づくそれぞれの取り組みが、SDGsとどう結び付いているのかという紐付けを、今年度から行っています。私たちの政策・事業が、世界の目標であるSDGsとどのように結び付いているのかということ意識しながらやっけていこうとしています。



スライド 31 「飯田市 ISO の中に SDGs の視点を導入」

それから、ISO（国際標準化機構）規格についても、飯田市はISO14001の環境マネジメントに取り組んできましたが、「だんだんとISO自体が目的化してきてはいませんか？」という投げ掛けをしていくなかで、ISOがSDGsにどう効くかという、“ISO for SDGs” みたいなことを実施することも検討しています。いろいろな見直しを掛けています。



スライド 32 「三遠南信自動車道の整備状況と沿線が進むまちづくり」

「ムトス」と「環境」、あるいは「公民館活動」といったものをキーワードにしながらまちづくりをやってきたということ、ここまでご紹介をいたしました。



スライド 33 「三遠南信地域における飯田市の位置」

三遠南信地域における飯田の位置は、先ほども見ていただきました。長野県の南の端である飯田下伊那地域、南信州地域と静岡県の西の端である遠州地域、愛知県の東の端である東三河地域、これらの地域が三遠南信連携ということで、今、取り組んでいます。

行政的な取り組みももちろんですが、もともと住民交流もありますし、これまでの間、民間での交流も盛んにやってきていますので、机上の話というよりは実態的に連携を進めてきていると思っています。

峡の付近で天竜川を渡る橋です。天龍峡が名勝指定されているものですから、文化庁との協議が必要でした。最初は、「こんなものを通せるわけがない」と言われていましたので、これを通すに至るいろいろなやりとりには、これはまたこれで一つの大きな物語がありますが、今日はちょっと端折りまして、この橋が開通したことによって、地域のなかで、いろいろな取り組みが進んでいます。

写真にありますのは、天龍峡大橋の周辺にできているものですが、この天龍峡大橋は、実は自動車道の下に歩道がぶら下がっています。この歩道の部分には市道になっており、名勝天龍峡の景観を橋の上から楽しんでいただける新しい観光資源になっています。

右側にある写真のように、普通は川面から、あるいは、川面近くから見る眺めだったわけですが、これを上にかかる橋の歩道から見るができるようになって、観光資源として非常に大きな効果が期待できるということで、お見えになる皆さんのためにガイダンス施設をつくり、もともとある温泉交流館の改修を進めてまいりました。



スライド 34 「リニア中央新幹線と中央道・三遠南信道」



スライド 36 「『天龍峡大橋』周辺での取り組み」



スライド 35 「『天龍峡大橋』周辺の整備」

この写真の天龍峡大橋は、三遠南信自動車道の一部として既に開通しているものですが、これは名勝天龍

実際に、人の動きもかなり出てきています。このスライドの天龍峡マルシェというのは、地元の人たちがテント市をやっています。これは年々、来訪者が増えているということですし、昨年からは始まった新しい取り組みとしては、プロジェクションマッピングを、天龍峡の遊歩道周辺で展開することで、これまでになく多くの人が夜間に天龍峡を訪れるきっかけとなっています。

残念ながら、コロナ禍で、今年は開始を見送っていましたが、感染状況を鑑みながら、間もなく開催することになっています。

それから、Airbnb社と飯田市、南信州観光公社が連携協定を結びました。Airbnb社が、天龍峡周辺を

一つの拠点にして、新しい民泊事業を飯田下伊那地域で展開しようと連携を組んでくれました。Airbnb社については、決して空き部屋貸し業ではなく、部屋貸しをするホストと部屋を借りるゲストをどのように結ぶか、そこから人間関係をつくり、リピーターづくりということにはなるのでしょうか、「人と人をつなげることがAirbnb社の創業の考え方です」というお話を聞いて、「それならぜひ一緒にやってください」ということで、今回、協定を結んでおります。これからコロナ後に向けて、この地域で新しい楽しみ方をしてもらえるような取り組みに発展していくことを期待しています。



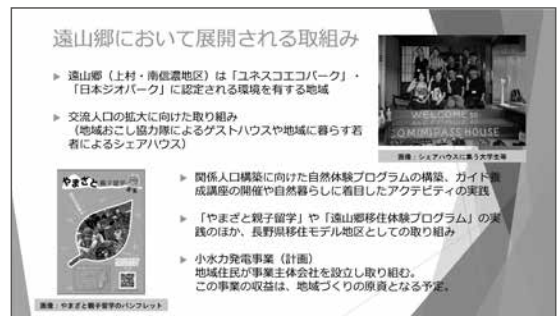
スライド 37 「民間レベルの取り組みから」

それから、浜松との交流、豊橋との交流ということで、それぞれ代表例を挙げています。

合併して浜松市になった水窪（みさくぼ）地区と、合併して飯田市になった南信濃地区は、県境を挟んで接していることもあり、昔から峠の国盗り綱引き合戦をやっていました。勝ったほうが、県境を1メートル相手側に動かすことができますという趣向でやっているものです。これは合併して、浜松市と飯田市になった後もずっと続いています。残念ながら、コロナ禍でここ2年ぐらいお休みしていますけれども、私たち市長も殿様の格好をして軍配を振って、勝った負けたで県境を移動するというセレモニーがあるわけですが、非常に大勢の方に楽しんでいただいている交流事業です。

それから、右側は、これは最近の記事ですが、飯田市のマルマンという味噌をつくる企業と豊橋市のヤマサちくわという企業が連携をし、飯田の焼肉と豊橋の練り物というそれぞれの地域の特徴を生かして非常においしい「辛みそ揚げ」を共同開発しまして、販売しています。先ほど申し上げたように、民間あるいは企業間の連携が三遠南信地域では盛んです。

次に、遠山郷における取り組みをご紹介します。



スライド 38 「遠山郷において展開される取組み」

だきたいと思います。遠山郷は、平成になってから飯田市に合併された旧上村・旧南信濃村という二つの村です。旧市内から一山を越えて行かなければなりません。具体的に道路で行きますと、一度、他の村を歩いていくことになります。遠山郷は人口減少や高齢化という面では、非常に厳しい地域ですが、自然や文化が残っているという面では非常に貴重な地域ですし、これからリニア中央新幹線や三遠南信自動車道が全通してくる時代において、さらに大変大事な宝物だと思っています。

遠山郷は「ユネスコエコパーク」「日本ジオパーク」に認定されている区域の一部であり、活用に向けたいろいろな体験プログラムなどが用意されています。

また地域おこし協力隊によるゲストハウスだったり、地元で暮らす若者がシェアハウスをつくっていたりして、交流人口が地道に拡大してきている手応えを感じています。

今年度から、この地域に魅力を感じて、お子さんをここで育てたいという方には、いきなり移住するといっても難しいでしょうから、「まずは親子で留学してみませんか」ということで地元の人たちと共に「やまざと親子留学」という取り組みを行っています。このような親子留学や移住体験プログラムをおこないながら、遠山郷の交流人口・定住人口を増やしていこうと取り組んでいます。

もう一つ、こちらに「小水力発電事業」と記載していますが、これも自然環境を活かして、小水力発電をおこない、そこから得られた売電収入を地域づくりの原資に使っていくという計画を進めようとしています。

先ほど紹介しました若者たちの活動ということで、写真をご覧くださいければと思います。このコンパスハウス（COMPASS HOUSE）は、地元の若者たちが古民家を改修したシェアハウスです。太陽堂は、昔商店であった建物を改装して、地域おこし協力隊だった人



スライド 39 「飯田市南信濃地区の若者たちの活動」

が開業したゲストハウスです。

遠山郷探検隊は、地元の若者たちが、この地域自然を体験してもらうこと自体を仕事にできないかと始めたものです。このような若者たちの取り組みが遠山郷で始まっていることを、私は非常に心強く見ています。



スライド 40 「遠山郷を未来につなぐための学習活動」

「遠山郷を未来につなぐための学習活動」とありますが、自然に恵まれた遠山郷の小中学校をユネスコスクールに登録しまして、持続可能な開発のための教育であるESD (Education for Sustainable Development) の取り組みを進めようとしています。



スライド 41 「三遠南信は宝の山」

この取り組みには、お世話になっているいろいろな大学の先生方にもご協力いただいています。

このような活動を通じて、大事な民俗芸能やお祭りもしっかり残していきたいと考えています。

それでは残り時間で、「リニア中央新幹線とまちづくり」について少しお話をさせていただきます。



スライド 42 「リニア中央新幹線とまちづくり」

リニア中央新幹線事業については、もともとは2027年に開業をするということで、JR東海が始めた事業です。これが開通しますと、東京・名古屋間を最速40分で結ぶようになることと併せて、各県に一つずつ設けられる駅に止まる各駅停車型のものが飯田にも止まることになるわけです。そうなりますと、飯田から品川までが45分から50分ぐらい、飯田から名古屋までが25分から30分ぐらいの時間で結ばれることになります。飯田市の場合は、東京へ行くのに、今は車で約4時間かかっていますし、名古屋へ行くのは2時間近くかかりますので、飛躍的な時間距離の短縮ということになります。



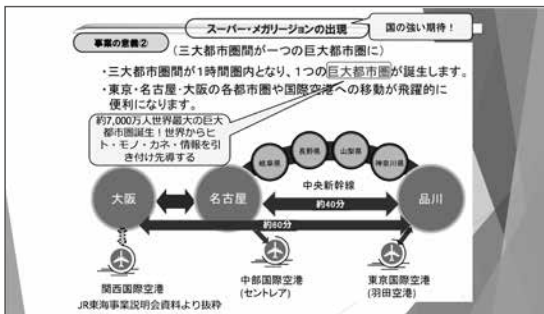
スライド 43 「リニア中央新幹線 (東京都・名古屋間) 2027年開業」

JR東海がリニア中央新幹線に取り組む理由は、東海道新幹線が開業から60年近くになるということで、い



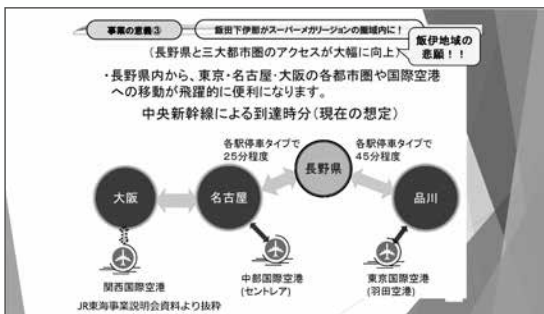
スライド 44 「事業の意義①」

つか損なわれるかもしれないということ、地震の心配があり、二重系化を図っておかないと、ものすごいダメージを受ける可能性があるということです。「二重系化」と「より短時間で結ぶ」ために、一直線で東京・名古屋・大阪間を結ぶ路線としてリニア中央新幹線が計画されています。



スライド 45 「事業の意義②」

このリニア中央新幹線が通る結果、将来的には東京・大阪間の行き来が約60分ということですが、これが実現すると6,000万人、7,000万人という大きな都市圏（スーパー・メガリージョン）ができ、それを地下鉄的にリニアが結ぶという姿になります。



スライド 46 「事業の意義③」

その沿線においては、それぞれ国際空港も非常に近いので、人とモノ、お金や情報の行き来が非常によくなり、それに伴い沿線が活性化するのはないかと、国も大きな期待をしているということです。

先ほど申し上げましたように、地域的に言いますと、これまで飯田市は都市圏とのアクセスが非常に悪かった地域ですが、リニア中央新幹線によって飛躍的に改善されるということに対する地域の期待は、非常に大きいです。

### リニアバレー構想

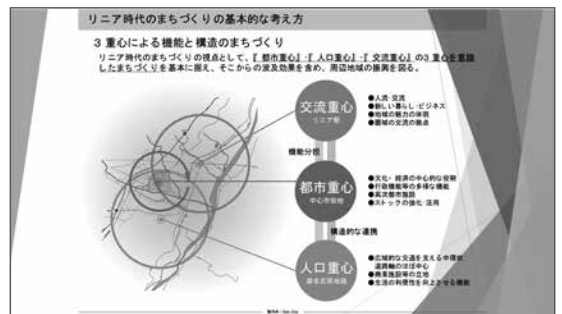
～信州・日本の伊那谷から世界のINA Valleyへ～

- ▶ リニアバレー構想を目指す姿
  - I 国際空港へ1時間でアクセスするグローバル活動拠点 ～世界とつながる～
    - 外資系企業やグローバル経済圏で活動する企業の中核機能の受け皿を目指すとともに、既存の産業集積をさらに次世代産業の創出を目指す。
  - II 巨大災害時のバックアップと食料・エネルギーの新しい供給拠点 ～日本を支える～
    - 都市機能や政府系研究機関の移転、企業の中核機能のバックアップ施設や災害発生時の食料供給・医療提供の拠点の受け皿などにより、日本を支える役割を目指す。
  - III 伊那谷の多様な資源を活用することにより、食料やエネルギーなどの新しい供給拠点を創出する。
    - 高度な都市空間と大自然が交差した「対抗促進圏」～ここで豊かに暮らす～
  - IV 世界から人を呼び込む活動フィールド ～ここでふれあう～
    - インバウンドも促した広域観光の推進により交流人口が拡大する感動のフィールドを目指す。

スライド 47 「リニアバレー構想」

このようなインフラ整備に対して、どのような姿を目指しますかということで、長野県が「リニアバレー構想」というものをまとめてくれています。

リニア沿線地域においては、国際空港とのアクセスも含め、世界に開かれた状況になります。飯田の場合も、羽田空港あるいは中部国際空港を使えば、少なくとも1時間半あれば、世界に向かうことができ、あるいは世界からやって来られるということですから、グローバルな活動拠点としての飯田を考えることができるようになります。その意味で、外資系企業やグローバル経済圏で活動する企業の機能を、本社そのものはもちろんですが、そうではなくても、そのバックアップ的な拠点や、研究所を移転したらどうですかと掲げ



スライド 48 「リニア時代のまちづくりの基本的な考え方」

ています。また、大都市圏あるいは東海道新幹線沿線が大きな災害にさらされかねないというときに、バックアップとしてその機能を内陸部に分散させてはどうかということが、国土形成としても考えられますので、そのような日本を支える地域ということも意識しながら取り組みを展開する必要があるということです。

では、飯田市として、どのようなことを考えているかということですが、これまでも中心市街地を一つの大きな重心として考えてきたわけです。今、人口の重心は、むしろ郊外に移りつつあります。そこに新しくリニア駅ができます。この三つの重心を意識しながら、まちづくりを考えていく必要があるということで、それぞれ「都市重心」「人口重心」「交流重心」と呼び、これらがうまく連携していくまちづくりをしていこうと考えています。

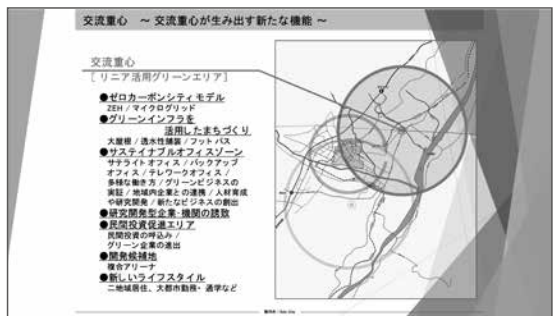
大ざっぱに言いますと、都市重心のところに、これまでの様々な都市的機能の蓄積がありますので、これをしっかり活かしていきながら、人口重心のあたりに、民間の大型ショッピング施設などの集積がありますので、その利便性を確保しつつ、新しい交流が生まれるリニア駅中心に、新しい21世紀型の政策を重点的に投入していこうという考え方です。



スライド 49 「都市重心と人口重心」

今、申し上げましたように「都市重心」については、地域の顔のようになっていますので、ここに集積している都市施設や、それを活かした「まちなかMICE」といったことを、これからはしっかり取り組んでまいります。「人口重心」の周辺には、生活の利便性を高める民間施設が集積しつつありますので、これはこれでしっかり活かしてまいります。

では、新たにできるリニア駅周辺はどうするかといいますと、先ほど来、お話ししている「ゼロカーボンシティ」の一つのモデル的なエリアとして、マイクログリッドを入れたり、ZEH（ゼロエネルギーハウ



スライド50 「交流重心～交流重心が生み出す新たな機能～」

ス)、つまり一次エネルギー消費量の収支がゼロになるような住宅を普及させたり、ゼロカーボンシティのモデル地域としてまいりたいと考えています。

それから、グリーンインフラを活用したまちづくりのところに「大屋根」とあります。これはリニア駅の周辺整備のときに、屋根をどうしてもつくとしたら、屋根を木材でつくるということ、舗装するとしたら、単にアスファルトを張ってしまうのではなく透水性の舗装にし、環境との共生を図っていきましょうとか、リニア駅の周りに歩ける場所、歩けるフットパスが備わっているまちづくりを考えています。都市空間のなかに、緑がしっかりと位置付けられているまちづくりをしたいということです。

それから、先ほど仕事も境を越えていくという話がありましたが、まさに、テレワークやサテライトオフィスを設けるとか、バックアップオフィスを設けるという動きに対して、このエリアがその受け皿になっていきたいとも考えています。

研究開発型企業や機関をぜひ誘致したいと思いますし、そういったまちづくりに賛同し、協力してくれる民間の企業に、ぜひ投資していただけるようになりたいと思っています。



スライド 51 「交流重心 [リニア活用グリーンエリア] の構想図」



これまで述べたことを地図上に落とすと、図のようになります。図の中心がリニア駅の予定地です。右上付近に「エス・パード」と書いてありますのは、もともと県立高校が統合に伴い空き校舎になったところを改修しまして、現在は産業振興センターとなっています。こことリニア駅を結ぶゾーンにつきましては、先ほど言いましたサテライトオフィスやバックアップオフィスのゾーンを中心にしていきたいと思っています。

それから、ゼロカーボンシティのモデルエリアとしましては、駅周辺整備により移転をお願いする方々に移っていただく先の街区、代替地街区を一つの中心としながら、ゼロエネルギーハウスであったり、マイクログリッドであったり、21世紀型の住まい方のモデルエリアとして取り組んでいきたいと考えています。

それから、このエリアと中心市街地とも新しいモビリティシステムで結ぶことで、それぞれの役割、特性を活かした地域づくりをできないだろうかと考えています。



スライド 52 「ナレッジ・リンク」

そして、スーパー・メガリージョン構想には、ナレッジ・リンクの形成という観点もあります。大阪から品川、さらにその先の筑波までを一つの沿線一帯と考えたときに、これらの知の創発拠点をつなぎ、そこから活力ある知の集積によって日本を元気にしていきたいという構想が、国にはあります。飯田は、このナレッジ・リンクのなかの、まさに真ん中あたりに位置するというので、いろいろな学術機能などの集積に取り組んでまいりたいと考えています。

これまででは、バーチャル大学的な大学の先生方のネットワークである「学輪IIDA」を中心にしながら、信州大学の研究講座なども設けることで少しずつ取り組んできましたが、現在、信州大学では新しい学部をつくらうという動きがあり、こちらをぜひ飯田に

誘致したいと考えております。信州大学に対しても、「ナレッジ・リンクのど真ん中にキャンパスを構えることで、もっともっと先を見据えて、発展的なキャンパス形成をしませんか」と申し上げて、新学部の誘致活動に取り組んでいます。これが直近の飯田のまちづくりといえますか、動きのご紹介となります。

### 〇リニアをどう迎えるか

- ・いたずらに都市的なものを追い求めるのではなく、飯田の自然風土、文化、先人の皆さんが築いてきた「暮らしの豊かさ」をしっかりと守っていく という視点が大切 =この地域の「らしさ」

### ◎目指すべきは「上質なローカル」

スライド 53 「リニアをどう迎えるか」

最後に、リニアをどう迎えるかということは、この地域にとって本当に大きな課題です。リニアが通るといことで、住民の皆さんのなかには都市的なイメージがあるのではないかと思います。私としては、いたずらに都市的なものを追い求めて、リトルトーキョーといいますが、コピーのような町をつくるのではなく、飯田の自然、風土あるいは文化、先人の皆さんが築いてきた暮らしの豊かさ。先ほど「日本一住みたいまち」というフレーズの由来を申し上げましたが、この暮らしの豊かさをしっかりと守っていくという視点や、この地域の「らしさ」を失わないようにすることが大事ではないかと思っています。

このような地域の「らしさ」を大事にしながら、田舎なのだけれども、別に不便ではないということで、目指すべきは「上質なローカル」だと思っています。私自身は、このような視点で、まちづくりを進めてい

### 『日本一住みたいまち』

住み「たい」理由は、人それぞれ  
⇒多様性が大事

「日本一」は、他を押し除けるのではない  
⇒協調性が大事 (not南信州ファースト)

スライド 54 「『日本一住みたいまち』」

けたらと思っています。

「日本一住みたいまち」と申しておりますが、先ほど申し上げましたように、住みたい理由というのは人それぞれですから、そのような多様性を大事にしながら、市民の皆さんのいろいろな困り事が一つ一つ解決して、いろいろな夢を一つ一つ形にしていくということを、30年間、積み重ねていけば、「日本一住みたいまち」はきっと実現できるだろうと確信をしています。

その上で、「日本一」と言うと他を押しつけるのかということですが、そうではありません。連携と協調がとても大事ではないでしょうか。多様性を認めることにもつながると思っていますし、それがまさに三遠南信地域における連携であったり、リニア沿線都市同士の連携であったり、もっと小さいところでは、南信州地域のなかでも飯田市と周りの町村が連携することではないかと思っています。そのように個の確立とともに連携・協調を大事にしていきたいと思っています。



スライド 55 「2050年、飯田は日本一住みたいまちになる」

この絵に描いたような30年後を、ぜひつくれるように、市民の皆さんと、これからも頑張っていこうと考えております。

以上で終わります。ご清聴いただきまして、ありがとうございました。